

石井忠雄作 「東京の空が燃えた日」

< 前編 >

(音楽) (暗い感じ)

石山優子ナレーション わたしは、石山優子という 57 歳の主婦です。1945 年(昭和 20 年)3 月 9 日。わたしは小学 6 年でした。その日、東京の本所、浅草などの下町には、強い北北西の風が吹いていました。その風は夕方になっていっそう激しくなり、その夜もアメリカ軍の空襲の警戒警報のサイレンがなりましたが、わたしたちはいつものように急いで防空壕に逃げ込みました。

(効果音) (サイレンの音)

母いそ 今夜はどこかねえ。焼夷弾は遠くから見ていると花火みたいに見えるけど、屋根から床まで抜けて落ちてくるそうだから、恐ろしいね。

優子 お母さん、ここは大丈夫なの？

母 そうねえ。ここもいつ空襲でやられるか分からないわ。

優子 こんなときにお父さんがいてくれたらなあ。

母 そんなこと言ってもしょうがないでしょ。お父さんは警防団のお仕事で出ているんだから。ここはわたしたちだけで頑張らなければ。

優子 あ、お母さん。空襲警報解除みたいよ。

母 今日は早いのね。

優子 なんか拍子抜けしたみたいね。

母 何言ってるのよ。いつもは「怖い、怖い。早く終わらないかなあ」なんて言ってるくせに。

父晴彦 (オフから)おおい、お母さん、ゆっこ、今日はまだ出ないほうがいいみたいだぞ。

優子 お父さん、どうして？

父 深川のほうの空が真っ赤だ。空襲らしい。あとで知らせに来るからそれまで待ってなさい。

母 すみません。気をつけてね。

優子 お父さん、ありがとう。

ナレーション 耳を澄ますと、初めは遠くに聞こえた爆撃音が次第に近づき、日本軍の陣地から発射する高射砲の音に混じって、爆弾が破裂するような音が防空壕を揺り動かします。そして、それがいつまでたっても終わらないのです。どのくらいたったのでしょうか。突然父が

父 みんな！ 早くここから出るんだ。火が回ったぞ。避難先は新堀国民学校だ。

おれもあとから行くから。

ナレーション 父は、それだけ言うと、また飛び出していってしまいました。父の役目は、人々を安全に避難させることでした。

その日の空襲はとてもひどく、父はやっとの思いでわたしたちに知らせに来たに違いありません。そして、それが父を見た最後でした。外に出てみると、父が言ったように、周囲は火の海でした。

(効果音) (逃げ惑う群衆の叫び)

優子 お母さん、早く、早く！

母 間って。少しは荷物を持ちださなくては。

優子 お母さん、隣まで火が来ている！

母 分かった。これだけにするわ。

ナレーション わたしは、身の回りのものだけをそそくさとトランクに詰めると、家を出ました。

母 あなたの学校はこっちのほうよね？

優子 うん。…あ、お母さん、ダメ！

母 本当だ！ 本田さんのお屋敷が燃えている。

ナレーション わたしの通っていた新堀国民小学校は、わたしたちの避難場所に指定されていて、そこへは本田さんという人の家の横を通らなければなりません。でも、そのお屋敷が燃え、道路に覆いかぶさるように立っている大きなエノキに火が付き、そこは通れなくなっていたのです。

母 優子、どうしようね。

優子 わたしたち、もうどこにも逃げられない。もっと早く家を出ればよかったのよ。

母 そんなこと言ったってしょうがないでしょ。さあ、こんなところでぐずぐずしてないで、橋に逃げよう。

優子 橋？ こんなときに橋なんて、大丈夫なの？

母 さあ、ぐずぐず言わないで。

ナレーション そして、わたしたちはいつの間にか厩橋うまやに来ていました。辺りは煙と火で、目を開けていることができません。わたしたちは、橋の欄干の下にやっとの思いで避難したのです。橋の上にはたくさんの方がいます。そして、橋の欄干が真っ赤に焼けているのが見えます。(間)どのくらいたったでしょう。わたしは暑さに我慢ができなくなり

優子 お母さん、熱い。お母さん、熱いよう。

母 お母さんも熱いのよ。我慢よ、もう少しの我慢よ。

優子 お母さん、いつまで我慢すればいいの？ わたし、我慢できない。どっかへ行こうよ。火のないところへ行こうよ。

ナレーション ちょうどその時でした。橋の上を大きな荷物を背負ったおばさんがやってきました。見ると、背中に背負った荷物に火が付いているのです。そして、荷物の

結び目が玉結びになっていて、ほどくことができないのです。ぼう然と見ていた母は、急に気が狂ったように言い出しました。

母 優子。死のう。川に入って死のう。
ナレーション 川を見ると、真っ赤に燃えた舟が流れています。そして、次々と飛び込む人の姿が見えます。それを見るとわたしは急に恐ろしくなって

優子 お母さん、待って！

母 優子、わたしたちは生きてはいられないわ。死ぬしかないのよ。さあ、こっちへいらっしゃい。何をしているの！

優子 お母さん、イヤ、イヤ！

ナレーション 母は、わたしを川に突き落とそうとすることです。その母の顔の恐ろしかったこと。わたしはそんな母を今まで見たことがありません。その時、「ドボン」という音がしました。ハッとして川を見ると、母が大事に持っていたトランクを川に投げ込んだのでした。そのあと母は放心したように橋の欄干下に座り込んでしまいました。わたしはショックでした。母がわたしを殺そうとした。あんなにも優しくかった母が

あれは、わたしが幼稚園の時でした。

(音楽) (回想。静かなブリッジ)

母 優子ちゃん、もう寝なくちゃ。

優子 ねえ、お母さん。またお話しして。

母 はいはい。昔々、ユダヤの国にね、一人の強盗がいたのね。仲間ととても悪いことをして捕まってしまい、死刑になることが決まったの。そして、罰を受けるその日、その強盗の横で十字架にはりつけになっているイエス様に出会ったの。イエス様は何も悪いことをしていないのに、十字架にかかれたの。それに比べて自分はとんでもないことをしてしまった。強盗は自分の犯した罪を悔やみました。その時に、もう一人の十字架にかけられていた仲間が、イエス様の悪口を言いました。

優子 それで、どうしたの？

母 それを聞いた強盗は悲しくなり、こう言ったの。「わたしたちは自分のした悪いことのために十字架にかかっているんだ。でもこの人はそうじゃない。」そして、イエス様に言いました。「イエス様、あなたが神の国にお帰りになる時、わたしを思い出してください。するとイエス様が、「さあ、お前は今、わたしと一緒に天国に入るんだよ」と言われ、その強盗を天国に連れて行ってくださったの。

優子 イエス様って優しいのね。

母 優子もイエス様を信じて、お母さんと天国へ行こう。

優子 お母さんもイエス様を信じているの？

母 ええ、信じているわよ。さあ、もうお休み。

(音楽) (ブリッジ。現実に戻る)

ナレーション その母は、今、狂ったように川に身を躍らせようとしていました。その足元の着物は、炎を上げて燃えていたのです。

優子 あ、お母さん、何するの？ イヤ、イヤ、お母さん死んじゃイヤ！

ナレーション わたしは、川に飛び込もうとする母の足に必至でしがみ付きました。その時です。

優子モノローグ 足が。お母さんの足が…。

ナレーション 母の右足は、燃え尽きてなくなっていたのです。

(音楽) (衝撃的なブリッジ)

ナレーション 3月9日の空襲では、一晩のうち、東京の下町で10万人以上の方が死にました。そして、多くの方が家や財産を失い、家族を亡くしました。わたしたちは、悪夢のような空襲が終わった翌朝、血のような色をした朝日を見ながら、自分の家に帰りました。道路には電線が垂れ下がり、煙で目を開けていることができませんでした。道路のあちこちには、真っ黒なマネキンが転がっています。でもよく見るとそれは、黒焦げになった人間でした。母は、どこで拾ったのか水道管の切れ端をつえに、足を引きずるようにして歩いています。途中で隣の下駄屋のおじさんに出会いました。

下駄屋のおじさん 石山さんじゃありませんか。

母 ……

おじさん 優子ちゃん、大丈夫かい？ お母さんの足、ひどいみたいだけど。お父さん、一緒じゃなかったの？

優子 うん。

おじさん どこに避難していたの？

優子 厩橋。

おじさん そう、それはよかった。

優子 おじさん、麻ちゃんは？

おじさん ああ、娘も女房も火で焼かれちゃったよ。麻は「お父ちゃん、助けて」なんて叫んだけど、どうにもならなかった。人間なんて罪深いもんだねえ。いざとなると自分のことばかりしか考えられなくてよう。そうだ、西町国民学校に救護班が来ているそうだ。そこへ行けば、お母さんの足、手当てしてもらえるかもしれない。そこまで送ってあげよう。いそさん、肩を貸してやるよ。

ナレーション こうしてわたしたちは、わたしの家のところまで来ました。ところが、家はすっかり焼けて何も残っていませんでした。ただ、わたしが小さき時に乗っていた三輪車が真っ赤に焼けただけ、家の前にポツンと置いてありました。

優子モノローグ 家が… ない。

ナレーション わたしは、そこにぼう然と立ち尽くしていました。

< 後編 >

ナレーション 1945年(昭和20年)3月9日の大空襲で焼け出されたわたしは、近所の下駄屋のおじさんに付き添われて、片足を焼け落とした母とともに、避難先の国民学校、今の小学校にやっとたどり着きました。

おじさん いそさん。西町国民学校だ。

母 ……

優子 お母さん、お握りよ。今、そこでもらったの。おなかすいたでしょう？

母 ……

優子 お母さん、どうしたの？・何か怒っているの？ それだったら言って。ねえ言って、お母さんったら。

母 ……

おじさん 優子ちゃん。お母さんを責めちゃいけないよ。きつとつらい思いをしたんだよ。そっとしておいておあげ。おじさんはちょっと出かけてくるから、待っていてね。夕方までには戻ってくるよ。もし、お父さんのこと分かったら調べてきてあげるからね。

ナレーション それからしばらくして兵隊に行っている兄の信一が尋ねてきました。

信一 母さんも優子も、無事でよかった。随分と探したよ。

優子 ああ、お兄ちゃん…。

信一 いやね、新堀国民学校に避難したと思って行ってみたんだが、あそこに避難した人はほとんどやられたって聞いてね。でもほんとによかった。母さん、足ひどいみたいだけど、どう？

母 ……

信一 優子、お母さん、どうしたんだ？ さっきから何も言わないじゃない。頭が変になったんじゃないだろうな。母さん、信一だ。分かる？

ナレーション 母は、あの夜から、あまりのショックに話すことができなくなったのでした。

おじさん やあ、信ちゃんか。よく帰ってこれたね。

信一 はい、部隊長が休暇を下さいましたので。おじさん、このたびは母や優子が大変お世話になりました。

おじさん いいや、困ったときはお互い様だよ。ああそうだ、お父さんのことだがね。今朝3時ごろ、新堀国民学校の前でお父さんを見た人がいたんだよ。その人の話によると、お父さんは防水用水の水を頭から何杯もかぶって、学校の中に飛び込んでいったのだそう。きっと皆が中にいると思ったんだろうな。

母 うっ、うっ。

優子 お母さん、大丈夫？

信一 耳は聞こえるらしいな。きっとお父さんのことが心配なんだ。そうだ優子、お前、

お母さんを連れてお父さんの田舎に帰ってろ。東京はまだ危ない。お父さんは、おれが探し出すから。なに、まだ死んだと決まったわけじゃないんだから。お母さんもいいね？

ナレーション それで、わたしたちは兄とおじさんに見送られ、満員の汽車に乗って東京を離れました。わたしは、母と2人で長野県にある父の実家に身を寄せることになりました。父はついに帰ってきませんでした。でも父の母、わたしのおばあちゃんは、温かく迎えてはくれませんでした。

しゅうとめ 親せきはいっぱいあるに、なんでこっちに来たんだね。わしら、おじいさんと2人でも食うにやっただというに、2人もごくつぶしが増えたんじゃ、どうなるんじゃ。ほかのところへ行くことはできないんかね。

母 ……

しゅうとめ それに、口もきけんじゃ、これからどうするんじゃ。

優子 お母さんが口がきけないのは、とてもつらいことがあったからです。なんとか一生懸命やりますから、置いてください。お願いします。

しゅうとめ 何がつらいことか。わしの息子の晴彦はどうした？ そのままほって逃げてきたんじゃろうが。

優子 違います。今、兄ちゃんが東京で捜しています。

しゅうとめ 本当かどうか分かったもんじゃない。

ナレーション それからのわたしたちの生活は、まるで針のむしろでした。住まいはおばあちゃんの家の鶏小屋を改造したところです。一番つらいのが空腹です。

しゅうとめ いそさん、あんた、うちにあったキュウリを食べなかったかね？ 白を切っても分かっているんだよ。さっき優子が家に入っていくのを見た人がいるんだ。これじゃまるで泥棒猫飼ってるみたいなもんなんだから。なかったら買って返してもらおうよ。

優子 お母さん、違う。わたしじゃない。わたしじゃない！

(効果音) (優子が母にピシャッと平手打ちを食う音。)

ナレーション その時の母の恐ろしい顔。わたしは、あの空襲の時、川へ投げ込もうとした母の顔を思い出していました。そんなことが何回もあり、わたしは次第に母を憎むようになりました。そして、わざと母を困らせるような悪いことをしました。そんなある日、学校の授業参観がありました。6年生で最後の参観だからできるだけ家の人に来てもらうようにと先生は言われました。しかし、わたしはわざと母に知らせませんでした。それには、母が嫌いなこともありましたが、そのころこんなことがあったからでした。

(音楽) (ブリッジ)

村の子供 A おい、われ、わりゃ東京から疎開だろう。われの母ちゃん口がきけねえんだってな。

村の子供 B それにさあ、優子の母ちゃん、びっこなんだよ。

A へえ、びっこかよ。今度父兄参観があるからよ、そんな時おれもよく見てみよう。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション こうして、その日の授業参観に、みんなのお母さんは来たのにうちだけは来ませんでした。

先生 内山さん、今日、あなたのお母さん、どうしたの？

優子 風邪を引いて来られなくなりました。

先生 そう。じゃあお大事にね。

ナレーション わたしはウソを言ってしまったのです。そんなある日のこと、母はわたしを町の教会に誘いました。昔教会に行っていた母は、その疎開先に教会にも何回か通っていたのです。わたしとの会話を筆談でするようになっていた母は、指でわたしに聞きます。

母 優子、町に教会があるの。1時間くらい歩くけど、一緒に行かない？

優子 イヤだ。ほかに用事があるから。

ナレーション 本当は、足の悪い母と歩くのが恥ずかしかったのです。その後何回か誘われましたが、そのたびに断っていました。そんなある日、学校の授業中のことでした。

(効果音) (教室の戸の開く音。)

先生 石山さん、お母さんが交通事故に遭ったそうよ。急いでおうちに帰りなさい。

ナレーション わたしは、一瞬目の前が真っ白になって、家に飛んで帰りました。母は家にはいないで、町の教会の近くの病院に体中包帯で巻かれて入院しており、そばにはその教会の牧師先生が付き添って来ていました。

優子 お母さん。

牧師 君が優ちゃんだね。お母さんによく似ているからすぐ分かるよ。お母さんは今寝ている。命に別状ないから安心しなさい。お母さんは、君と同じくらいの女の子を助けようとして、車にはねられたんだ。どうして分かるかい？

優子 いいえ、どうしてですか？

牧師 その女の子を君と間違えたんだね。お母さんは空襲の時、君を川に突き落とそうとしたんだってね。

優子 そんなこと、先生に話したんですか？

牧師 うん。その時、お母さんは君を残して死ねないと思ったんだよ。君は、お母さんの足のヤケド、知ってるだろう？

優子 ええ。

牧師 あのヤケドは、君のために負ったんだ。

優子 え？

牧師 あの時、火の粉が雨のように降っていた。それが着物に付くとパッと燃え上がる。だからお母さん、優子ちゃんの着物の火の粉を払うのがやっとで、自分の足に火が付いたのを消すことができなかったんだよ。あまりの熱さに、お母さん、もう生きていけないと思って、川に飛び込もうとしたんだね。

優子 ...わたし、知らなかった。それなのに、お母さんの足のこと、恥ずかしいなんて思ったりして。どんなにつらかったでしょうね。

牧師 お母さんは、君を殺そうとしたことをとても苦しんで痛んだよ。神様の下さった命を、たとえ一時でも自分で奪おうなんて思ったことをね。

優子 先生、どんなことをしても母に謝らなきゃならないのはわたしです。わたし、お母さんを苦しめたり、平気でウソをついたりしていたんです。

牧師 優子ちゃん。君は今とても大切なことに気がついたね。自分では気がつかなかったろうけど、お母さんに罪を犯していた。お母さんが君のために足をヤケドして命を守ってくれたのに、君はお母さんを恥ずかしいと思っていた。わたしたちが神様に対してとっている態度も同じなんだよ。

優子 小さいころ、イエス様の十字架と強盗の話を知ったことがあります。母がよく話してくれました。

牧師 そう。一人の強盗は、自分のした悪いことを棚に上げ、イエス様をののしったんだよね。

優子 そして、もう一人は自分の罪を悔い改めてイエス様を信じ、天国へ行ったんですよね。

牧師 そうだよ。

優子 先生、わたしもイエス様を信じたい。母のように。

ナレーション その時でした。

優子 あ、母、気がついたみたい。何か言いたいみたいです。

牧師 そうか。事故のショックで口がきけるようになったのかもしれない。

ナレーション わたしは、あの時の母の言葉を、45年たった今でもはっきりと覚えています。母は、涙をいっぱい浮かべて、「優子、ごめんね」と言ったのです。そして、途切れ途切れにこう言い続けました。

母 祖母の家でつらく当たったのも、そうやってでも、何とかお前を家に置いておいてもらおうと思ったからなの。そのたびにお母さん、一晩中、イエス様に泣いておわびしていたのよ。

ナレーション 東京の空が燃えたあの日、母は自らの体の一部を捨てて、わたしに永遠の命を与えてくれたのです。わたしが洗礼を受けたのは、それから間もなくでした。

< 完 >